



▲入選した「祝還暦」は、横浜の作品展の中でも展示された。



▲町内外でも展示会を開催し、多くの人にキルトの持つ魅力を伝え続ける。

第21回インターナショナルキルトウィーク横浜2013
で初入選

もり かわ
森川 博子さん (宝町)

「手縫いの持つあたたかさを

1人でも多くの人に伝えていきたいですね」

表地と裏地の間にキルト芯を入れて重ねて縫い合わせる「パッチワークキルト」。その作品展である「第21回インターナショナルキルトウィーク横浜2013」は11月14日から16日まで横浜で開催され、「和のキルト部門」で森川博子さん(宝町)が初入選を果たした。「入賞の知らせを聞いたときはとにかくうれしかったですね」と振り返る。

入賞した作品名は「祝還暦」。206×175センチ四方に、着物柄をイメージして描かれたパッチワークキルトの中に、還暦にちなんで随所に赤の布がアクセントとして使われている。作品は全て手縫い。「完成までは1年ほどかかりました。作品づくりは、地道な作業の繰り返し。できたときはうれしかったというより、ほっとしたのを覚えています」と感慨深く話す。

パッチワークキルトを始めて23年。友人の誘いでキルト教室に通ったのがきっかけだった。

完成したときの達成感と、その作品を見ると当時のことを思い出して懐かしむことができるのが魅力と話す森川さん。今では「ヒロパッチワークサークル」の主宰者として、約30人の受講生にキルトの魅力を伝えていく。「それぞれ自分の作りたい作品を和気あいあいと楽しく作っています」と笑顔を見せる。そのほか、熊本市内で展示会を行ったり、一昨年と昨年は金魚の館でキルト展を行ったりと、町などと関わりながら広くキルトの魅力を伝えている。

横浜の作品展を見て新たな刺激を受けたと話す森川さん。「昨年と今年で父と母を見送ったこともあり、なかなか作品の製作に没頭する時間はありませんでした。しかし、作品展を見て、新しいことにチャレンジしてみたくまりました」と瞳を輝かせる。次の目標は世界中のキルト作品が集う国際キルト展の入選。その目標を原動力に、今日も作品に糸を通し、新たな命を注いでいる。